（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　平野　貴大

平野氏が研究対象にしているイマーム派は、現在のシーア派諸派の中の最大多数派である十二イマーム派の前身である（一般に単に「シーア派」と言う場合にはこの十二イマーム派を指す）。シーア派諸派に関する思想研究は 20 世紀後半以降各領域において着実に進展してきているが、10 世紀序盤以前の時代については不明な点が多数残されている。その理由は、10 世紀序盤以前のシーア派諸派の関連文献がそれ以後と比べると極端に少ないからであり、10 世紀中盤以降とそれ以前の時代との間に思想上の断絶があるのかどうかについても論争がある。平野氏の研究は、イマーム派文献がある程度まとまって現存する最古の時代である小幽隠期（874-941 年）に遡るとみなされるタフスィール（クルアーン解釈）書、ハディース（伝承）集を読解することで、小幽隠期のイマーム派思想を再構成し、10 世紀中盤以降の十二マーム派思想との間の連続と不連続を明らかにしようとするものである。H. Corbin の学説を継承する Amir-Moezzi は 10 世紀序盤以前のイマーム派と 10 世紀中盤以降の十二イマーム派との間には断絶があるとし、前者を極端派（シーア派の思想潮流において生まれた集団で、特定の指導者を神格化する思想や輪廻思想などに特徴がある）に近いものと考えた。これに対し Crow らは Amir-Moezzi の説をバランスを失した極端な理解であると批判した。平野氏の研究は、Crow らの流れに沿いながらも彼らが十分に分析的に記述できなかったイマーム派思想の全体像を最古の文献に基づいて提示しようというものでもある。

平野氏はまず第 1 章で先行研究を論じた後、第 2 章において、10 世紀序盤以前に書かれたとされる文献を網羅的に吟味し、分析対象となるテクストを 6 つに絞り込む。第 2 章で限定された小幽隠期のテクストに基づいて、第 3 章ではタフスィール分析に基づいて極端派以外のシーア派諸派（特にザイド派）との近接性が指摘され、第 4 章ではクルアーン解釈における秘教性という観点からイマーム派が極端派とは違い顕教的側面をも重視していることが明らかにされる。第 5 章では小幽隠期の中で最も極端派に近いと見なされてきたサッファール・クンミーを取り上げる。彼の場合も極端派に通じる教義が部分的に見られるとはいえ、極端派教義の多くを否定していたことが示される。第 6 章では 10 世紀中盤以降の十二イマーム派と連続する法規定が小幽隠期に既に議論されていたことが明らかにされ、第 7 章では、イマーム派の教義の特徴はグノーシス主義に由来する二元論にあるとする Vilozny の説が批判される。

Amir-Moezzi と Crow を対立的に捉えすぎているのではないか、Amir-Moezzi らと比べて現代十二イマーム派学者の主張に対する批判的検討が不十分であったのではないか、「～派的」という表現が多義的で誤解を招くのではないか、といった指摘はあったが、イマーム派最古の文献群を網羅的に読解した上で、これまで注目されてこなかった、イマーム派の極端派以外の諸派との共通点や顕教的教義を明らかにし、先行する Amir-Moezzi とは異なる視点からイマーム派像を提示した点はシーア派思想研究に対する重要な貢献である。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。